

# 「お糸池」 （お糸池にまつわるお話）

小倉南区

むかし小倉南区呼野よぶののあたりに、おたね、お糸の母娘おやこが住んでいました。お糸はたいそう気立てのよい母親思いのむすめで、父おやじが病氣いたばたらくなつたあと、体の弱い母親を助けようと近くの家々の下働きをしてわずかばかりのお金をかせいでいました。

呼野の里では、田んぼの水を確保するために、村人が一生懸命に力を合わせ、三年の月日をかけて川をせきとめ、池いけをつくりました。

「池のおかげで良い収穫しうがくじゃ。」と大喜びしたのもつかの間、次の年の田植えが終わった頃ころに大雨ふが降つて、池の土手どがくずれてしましました。

その後も、土手は修理しゆうりしては切れ、修理しては切れということが何度もおこりました。度重なる工事たびかさと、米の不作で、さすがに三度目に土手が切れた時には、村人たちはすっかり投げやりになりました。庄屋しょうやさまのところに集まって相談そうだんしても「もうわしはいやぢや。何度やっても同じことじや。」と弱気な意見ばかりです。お糸の家の源右衛門げんえもんが「わしら一代のためだけじゃないぞ。子や孫まごの代まで考えてもう一へんがんばろうじやないか。」と村人の一人ひとりを説得せつとくして、やつと皆もう一度やつてみようという気持ちになりました。池の修復工事が始まりました。お糸も毎日のように働きました。始めたものの度重なる難工事なんこうじに疲れ切った村人たちの間では「人柱ひとばしらをたてたらどうじやろうか。」といふ声がきかれ始めました。「誰がなるのじや。まさかくじ引きもできまい。」「たとえ田んぼがだめでも、そんなことはできん。」というものの、度重なる災難さいなんに苦しんできた村人は次第に心が傾いてきて「この池の仕事に出てきている者で、着物のやぶれのつくろいに横布よこぬのをあてている者が人柱に立つとしたらどうじや。」という話が出てきました。

ある日、「腰まきのすそのほころびに横布をあてたものがおるぞ。」見るとお糸です。お糸は顔をかくして家へ逃げ帰りました。

家へ着くなりお糸はパツタリと倒たおれてしましました。おたねがびつくりして抱だきおこすと、お糸はおたねの顔をみつめながら涙なみだをポロポロとこぼします。「かあさん。このお糸が人柱に・・・。」「何だつて。」とおたねも言葉が出ません。お糸は工事場でおこつた事を話しました。おたねはお前がいなくなつたら私はどうしてくらすのじゃと泣くばかりです。母親をみつめていたお糸は「かあさん、人は生まれたからにはどうせ一度は死ぬんじや。わたし一人の命で、村の人を救すくえるのなら死んで池を守るんじや。」とかたい決心で言いました。

数日後、白装束しろしょうぞくに身をつんだお糸を乗せたこしが池の土手に着きました。後には村人の長い列が続いています。読経どきょうの後に、お糸のひつぎが土手の奥深くに置かれました。村人たちは涙を流しながら土をかけていきました。お糸に報むくいるため村人は夜も昼も必死に働き、まもなく池は完成しました。

それから二百数十年「お糸池」の土手は切れることなく、静かに緑色の水をたたえています。

